

ったが、参考としてこれと無毒性量等 3.0 mg/kg/day から、動物実験結果より設定された知見であるために 10 で除して求めた MOE (Margin of Exposure) は 100,000 となる。環境媒体から食物経路で摂取される曝露量は少ないと推定されることから、その曝露を加えても MOE が大きく変化することはないと考えられる。このため、本物質の経口曝露による健康リスクの評価に向けて経口曝露の情報収集等を行う必要性は低いと考えられる。

吸入曝露については、無毒性量等が設定できず、曝露濃度も把握されていないため、健康リスクの判定はできなかつた。なお、吸収率を 100% と仮定し、経口曝露の無毒性量等を吸入曝露の無毒性量等に換算すると 10 mg/m³ となるが、参考としてこれと限られた地域の一般環境大気の実測データとして報告のあった最大値 0.0014 μg/m³ 未満から、動物実験結果より設定された知見であるために 10 で除して求めた MOE は 710,000 超となる。このため、本物質の一般環境大気の吸入曝露による健康リスクの評価に向けて吸入曝露の情報収集等を行う必要性は低いと考えられる。

曝露経路	有害性の知見				曝露評価		リスクの判定			評価
	リスク評価の指標		動物	影響評価指標 (エンドポイント)	曝露の媒体	予測最大曝露量 又は濃度				
経口	無毒性量等 3.0 mg/kg/day	ラット	流涎、体重増加の抑制	飲料水	- μg/kg/day	MOE	-	×	(○)	
				地下水	- μg/kg/day	MOE	-	×		
吸入	無毒性量等 - mg/m ³	-	-	一般環境大気	- μg/m ³	MOE	-	×	(○)	
				室内空気	- μg/m ³	MOE	-	×	×	

4. 生態リスクの初期評価

急性毒性値は、甲殻類ではオオミジンコ *Daphnia magna* の遊泳阻害における 24 時間 IC₅₀ 22,000 μg/L、魚類ではキンギョ *Carassius auratus* の死亡における 96 時間 TL_m 22,000 μg/L、その他の生物ではテトラヒメナ属 *Tetrahymena pyriformis* の増殖阻害における 48 時間 IGC₅₀ 94,200 μg/L が信頼できる知見として得られたため、アセスメント係数 1,000 を適用し、急性毒性値に基づく予測無影響濃度 (PNEC) 22 μg/L が得られた。慢性毒性値は、信頼できる知見が得られなかつた。

本物質の PNEC は、甲殻類及び魚類の急性毒性値から得られた 22 μg/L を採用した。

本物質については、予測環境中濃度 (PEC) を設定できるデータが得られなかつたため、生態リスクの判定はできなかつた。過去の公共用水域の淡水域及び海水域の濃度 (0.076 μg/L 程度及び概ね 0.005 μg/L 未満) と予測無影響濃度 (PNEC) の比は 0.1 よりも小さくなる。

本物質については、2001 年度以降の顕著な製造輸入量の増加や環境中への排出量の増加は報告されておらず、新たな情報収集をする必要性は低いと考えられる。

有害性評価 (PNEC の根拠)			アセスメント係数	予測無影響濃度 PNEC (μg/L)	曝露評価		PEC/PNEC 比	PEC/PNEC 比による判定	評価結果
生物種	急性・慢性の別	エンドポイント			水域	予測環境中濃度 PEC (μg/L)			
甲殻類 オオミジンコ /魚類 キンギョ	急性	IC ₅₀ 遊泳阻害 /TL _m 死亡	1,000	22	淡水	-	-	×	○
					海水	-	-		

5. 結論

	結論		判定
健康リスク	経口曝露	リスクの判定はできなかったが、情報収集等を行う必要性は低いと考えられる。	(○)
	吸入曝露	リスクの判定はできなかったが、情報収集等を行う必要性は低いと考えられる。	(○)
生態リスク	現時点では作業は必要性ないと考えられる。		○

[リスクの判定] ○：現時点では作業は必要ない、▲：情報収集に努める必要がある、■：詳細な評価を行う候補、×：現時点ではリスクの判定はできない
(○)：情報収集等を行う必要性は低いと考えられる、(▲)：情報収集等の必要があると考えられる、(-)：評価の対象外、あるいは評価を実施しなかった場合を示す